

トリーの作成と平野さんの仕事が、昆虫学界においても、一般社会においても、もっと正当な、高い評価を得ることを期待したい。

引用文献

平野幸彦, 2004. コウチュウ目 Coleoptera, 神奈川県昆虫誌, Vol. II, pp. 335-835.

平野幸彦, 2017. トムラウシの甲虫目. 神奈川虫報, (194) : 86 pp.

野村周平・平野幸彦, 2014. これは一体何だ?!—カギツメヒゲトコメツキ(ヒゲトコメツキ科) 中脚付節の走査型電子顕微鏡による観察—。さやばねニューシリーズ, (13) : 17-20.

野村周平・平野幸彦・斉藤明子・上野俊一・渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科学博物館専報, (36) : 185-255.

平野さんを偲ぶ

高橋和弘

〒259-1217 平塚市長持 239-11

平野さんと初めて会ったのは、確か神奈川県昆虫談話会の例会の席上だったと記憶している。その席上で、たまたま大学の後輩であることがわかり、以後、甲虫関係以外に大学の後輩という立場でも親しくお付き合いさせていただいてきた。

平野さんとの思い出はたくさんあるが、一番印象に残っているのは、その年齢に見合わない体力である。もう20年以上も前になるが、丹沢大山の調査を平野さんらと引き受けたことがあった。丹沢はさほどの標高が高い山ではないが、行かれた方はよくご存じのとおり、実際に登るとなると、途

中の坂がきつくなりしんどい登山となる。当時の若手?を中心に数名のメンバーで登山を開始した。平野さんは、恐らくその中で最年長であったと思われる。にもかかわらず、多くのメンバーが丹沢山から蛭ヶ岳への経路でへばってしまう中で、最後まで平然と歩かれていたことにはまったく驚かされた。さらに、蛭ヶ岳山頂に着いた後でも、疲れて小屋で休憩をとっているメンバーを尻目に、すぐに、一人で周辺の採集に出かけられ、朽ち木を叩いて採集している音が周囲から間断なく聞こえてきた。当然、採集品の成果にもはっきりと差がついたことは、言うまでもない。このように、採集のうまさはもちろんであるが、体力に関しても年齢をはるかに超えた大変優れた方であった。

もう一つ記憶に強く残っているのは、虫寿のことである。虫寿とは、平野さんが提唱された虫屋に向けた賀の祝いのことで、虫にちなんで64歳の誕生日を祝う行事である。何かの席上で、平野さんが「そろそろ64歳の虫寿をむかえる」とおっしゃったことから、この言葉が知られることとなり、さらに、神奈川県昆虫談話会の有志が中心となって、祝賀行事に取り組むことになった。行事は、遠く名古屋から故佐藤正孝さんが駆け付けるなど、盛大な宴会で行われ、大変華やかなものであった。その中で、私は記念誌の編集という大役を仰せつかったが、これが実に大変な作業であった。発行日が祝賀会当日と決められており、厳しい締切日が設定されてはいたのだが、祝賀原稿のうち特に大御所の先生の皆さんの入稿が全般に遅れ気味で、最後に届いた原稿は、印刷屋から示されたデッドラインの前日という有様で、届いたばかりのファックスからワープロで必死になって印刷原稿を起こ



したことは、今でも懐かしく思い出される。当日の会場で、平野さんから記念誌の発行が期限に間に合ったことに対して、ねぎらいの言葉をいただいたことは、大変ありがたいことで、苦勞が報われたと今でも感謝している。

私だけではないだろうが、平野さんにもっともお世話になったのは、何といても甲虫の同定である。過去に神奈川県内の市町村単位のファウナ調査が、あちこちで行われた時期があり、私もいくつかの調査に関わった。その中で、結果をまとめるうえで、最も重要な同定作業を、平野さんがメンバーに入っていれば、すべてお願いすることができ、その他のメンバーにとっては、楽することができ実にありがたいことであった。また、平野さんが関与しなかった、私自身の調査でも、同定の難しい分類群は、すべてひとまとめにしてお願いすれば、すぐに結果を教えてもらうことができた。恐らく同様の経験をされた方は、全国に数多くおられるのではないと思われるが、すべての甲虫類の同定をほぼ一人で完遂できてしまう点

に関しては、平野さんは本当に偉大な方であったと今でも思う。

病気になる前、神奈昆虫会の席上で、「終活を始めています。」と何回も発言されておられたが、その割には、あちこちへ採集に行かれ、さらには大部のトムラウシの報告をまとめるなど、とても終活を始めているようには見えなかった元気な平野さんであったが、発病されてからは、車椅子の生活となられ、年齢のこともありお別れの日が近いことがひしひしと感じられた。今年になって、新型コロナウイルスの影響のため、お見舞いに行くこともできず情報が途絶えた中で、突然の連絡により、一か月以上も前に逝去されていたことを知り、その報を聞いた時にまったく信じられず呆然とした思いであった。添付した写真は、虫寿記念号の表紙に用いた写真の原板であるが、このように元気だった平野さんの姿を偲びつつ、心からの御冥福をお祈りしたい。

平野さん、ありがとうございました

吉富博之

愛媛大学ミュージアム

平野幸彦さんが亡くなってからずっと、彼の膨大な業績の中でも一番は何だったのか、考えている。

平野さんを知ったのは、中学生の頃だった。地元の書店で偶然手にした「甲虫とつきあう本」(平野幸彦, 1985) は、甲虫を好きになったきっかけ

になり、ずっとバイブルとして読んでいた。大学に進学し初めて学会でお話した時は本当に緊張した。ご自宅にお邪魔させ



平野さんの偉大な業績の1つ「甲虫とつきあう本」の表紙(中学生の時に購入した本はボロボロになってしまった。この写真は最近古本で購入したもの)

て頂き標本もお借りした。先の本には側面に分類群のスケッチが貼られているインロー箱の写真が掲載されていて、ご自宅でその箱を見たときはあの本の箱だ、などと頓珍漢なことを言って平野さんに笑われた。修士論文執筆の際にはたくさん標本をお借りし調べさせて頂いた。マルハナノミは体が壊れやすく標本にしにくいから嫌いだと言われ、ちょっとショックだったが、思えば私も硬い虫の方が好きだった。

時は過ぎ、十川君とヨツボシテントウダマシの研究をしていた時、正体不明とされていたベニヨツボシテンダマを思いがけず再発見してしまった。何とか自分たちで論文文化したいと思い、論文を投稿する直前まで極秘にしていた。特に平野さんと生川さんにはばれないようにしようとしていた。きっと彼らのコレクションの中にも入っているだろうから、気付かれると先にぱっと発表されてしまうかも知れないとの判断だった。原稿を投稿する直前にお二人に確認してから投稿した。そ